

『君たち、中国に勝てるのか』

―自衛隊最高幹部が語る日米同盟VS中国― を読んで

(岩田清文尾上定正)

武居智久兼原信克著

柴田 幹雄 陸自75

本書は『偕行』9・10月号で紹介した「自衛隊最高幹部が語る台湾有事」の続編ともいえるもの。前著は台湾有事のシミュレーションの内容などを紹介・解説したもののだが、本著はそれを踏まえて著者4人がそれぞれの見識をもとに息の合った議論を展開している。



表題の『君たち、中国に勝てるのか』は、平成30年に策定された「防衛計画の大綱」を作る際に、居並ぶ自衛隊最高幹部を前にして、いきなり安倍首相から問われた言葉とこの。このような問いを発した首相は

安倍首相だけだった。単純な勝負でも勝つかどうかは不定である。ましてや戦争のような壮大な事象は無数の条件の絡み合いだから勝負の行方は不定であり「勝てるか？」の問いに単純に答えるのは難しい。しかし、第9章「日本は勝てるのか」で、「アメリカと組んで、日本の腰が砕けずいたら、中国の台湾戦争は抑止できる。もし始まったも勝てると思います」と書いている。ただ続けて「しかし、たとえ勝ったとはいえ戦争で日本が甚大な損害を受ければ意味がない」とも述べている。全体として本書では、中国が「日米・有志連合国には勝てない」と思わせる条件・態勢を整えて、紛争を抑止するためどうするかを、議論している。

日本がこれから考え、認識し、整えるべき条件とは何なのか。本書では次のように9つの章で展開している。

- 第1章 台湾有事は予想より早い
- 第2章 君たち、勝てるのか
- 第3章 日米VS中国 どちらが強いのか
- 第4章 日本のサイバー敗戦
- 第5章 台湾有事米軍は台湾に集中する

第6章 国のために戦いますか
第7章 もし、中国が日本に戦術核を使つたら

第8章 4年以内に必要な継戦能力
第9章 日本は勝てるのか

これらの章のタイトルを見ただけでも興味をそえられる。

「日米VS中国 どちらが強いのか」

では、2025年における西太平洋の両者の戦力について述べ、単純に比較すれば圧倒的に中国が有利としている。今まで無敵艦隊だった米空母打撃群も中国の対艦弾道弾DF21Dの脅威は無視できず、中国から1500キロ以内には接近を躊躇する。艦艇や航空機も数的にはさらに格差が広まる。だがこういつた目に見える戦力のほか、目に見えない戦力即ち情報、指揮統制のネットワークなども重要だが、米国はまだまだ強力である。これをどのように考え、中国を押ししていくのか、さらに中国の庭先である西太平洋への距離の克服、同盟国との連携について述べている。

「日本のサイバー敗戦」という刺戟的なタイトルの章は、「日本のサ

イバー軍は戦えない軍隊」という言葉で始まっている。ことサイバー戦では専守防衛は成立しない。野球でもサッカーでも守備だけでは相手はやりたいた放題、必ず負ける。サイバー空間に国境はない。専守防衛にこだわの意味があるだろうか。サイバー戦では、核戦略で言うところの相互確証破壊の思考をしなければならぬ。攻撃すればそれ以上の反撃が来る。それができて初めてサイバー攻撃は抑止、対抗ができるのだ。そしてその攻撃が許されるのは軍隊だけである。しかし自衛隊のサイバー部隊はあまりに弱小であり、国家全体としてのシステム構成も法体系もこれからの課題である。

「もし、中国が日本に戦術核を使つたら」の章では、日本の核戦略について米国の核共有を議論すべきであると述べている。全くそのとおりであり、さらに議論だけでなく実際に核共有を実行に移すべく踏み出してほしいものだ。

またこの章では日本の核兵器製造能力についても述べている。日本は本気になれば核兵器を製造でき、その運搬能力も持っていることを米

もロシアもそして中国も知っている。これが日本の暗黙の抑止力になつていく。即ち中国も露骨に核による恫喝をすれば、日本は核武装に政策転換するかもしれないと思わせる。米国も拡大抑止を確実に提供する意思を示さなければ、日本は独自核武装に向くかもしれないと危惧させる。これは大きな日本の潜在的なパワーなのだ。原子力発電所の機能維持を含め総合的な原子力政策・戦略を考えるべし、と提案している。

「国のために戦いますか」の章では、日本全体の安全保障に関するメタリテイルの問題が指摘されている。日本有事の時あなたは戦いますかという質問に、「はい」と答えたのはわずか13・2%だという。戦うことそのものを忌避する、または悪であるともいうような精神構造なのである。筆者は侵略軍に抵抗せず降伏すれば、若い男女は徴兵され銃を持たされて日米連合軍と戦わされることになると思っている。本書でも、ロシアが日本人をシベリアへ送り6万人が死んだことや、中国が香港で行ったような自由の剥奪があることをしっかりと認識せよという。

政府の戦争遂行の機能・能力、法的側面の問題など、この章を読むとなんとも歯がゆくなることが多いけれども、主権者たる国民の一人として我々が一つ一つ着実に、しかし迅速に解決していかなければならない事項である。他の章でも学ぶべきことが多い。安倍首相は「君たち、中国に勝てるのか」と聞いたとき「自衛官は何人の死ぬのか」とも問うたという。国家の最高司令官として有事に戦う自衛官の命を意識してくれる安倍首相は稀有の存在だった。その首相への回答が本書なのである。その答えは冒頭でも記したように、「抑止できるし、もし始まっても勝てると思いません」のだが、「日本が腰砕けにならなければ」という条件が付いている。結局は日本人の自らの国は自ら守る。守るために必要なら戦うという気概こそが重要なのである。

安全保障3文書が出され、予算も大幅に増加するが、国を守ることは航空機やミサイルを調達するだけでは達成できない。中国の脅威に対してこれを確実に抑止し、勝つことをよめるのか、その答えが本書にある。偕行社会員は是非「一読を」。